

# ナナイヤと 灰色のおおなみ

作●松居 友  
絵●ふりや かほこ

女子パウロ会





# ナナイヤと 灰色のおおなみ

作・黒岩 友 絵・山崎 幸子

絵本



第1章 ナゼイマ、ひとりでナロルに願文の

ナゼイマの村・77

別れの目・78

第2章 本の贈りナゼイマ

マイナースさんと本の贈りのお話・77

夜更草・78

ナロルの村・79

第3章 ナゼイマと秋色のお話

りんごのジャムつくも・82

別色のお話・79

第4章 ナゼイマと常の男の子

恋しい目・80



ピボロンの花壇・101

第5章 トロールに遊びかけられたお話

ベッコイナおばあさんが、はうきでトロールを遊ばせられたお話・102

はじめてお話をすべも・103

ナゼイマとスザンナのお話、トロールに遊びかけられる・104

第6章 母さんとお友だち

ふよきの目・109

常衣のお話・108

母さん・111

第7章 たんぽぽのまごころ

春の絵かきさん・104

たんぽぽのあくらしもの・105



ナダイヤと灰色のおおみ



ナダイヤ  
おおみ

中島輝子

第1章 ナディヤ、ひとりでナロルに旅立つ



ナディヤの村

母さんがお産で世に別世になつたのは先日のことでした。

ナディヤが学校から帰つて来たとき、母さんは、倉庫でお菓子をたくらんでいます。家のなか  
は、わくわくするようなお菓子のにおいでいっぱいでした。

ところが、ナディヤが腹を痛がっているとき、倉庫から「ナディヤ、ナディヤ」とよお母さん  
の声が聞こえたような気がしたので、おけつけると、母さんがしゃがんでいました。

「母さん、母さん！」

ナディヤは駆けよと、母さんのもとに駆けよりました。

「どうしたの、母さん、どうしたの。」

母さんが母さんをおひきして泣きおこし、からだがさかさまでなんとおソナアーまでつれていって病

たると、母さんはしほりたすような所ではないました。

「父さんや、よんで来て、お願ひ。」

「すぐによんでくる。」

ナディヤはきけよと、近くの村役場で働いている父さんのところへ、大急ぎで走っていったのです。

父さんは、やりかけの仕事をはきけよだして、大急ぎでかけつけました。

「マリヤ、マリヤ、どうしたら、だいいょうよか。」

父さんは、青いそとな母さんをおひき手にだきました。

「ナディヤ、急いでタチユカ先生をよんで来ておくれ。」

ナディヤは、服のひこくをぬかるとびたすと、タチユカ先生のところにおかけていきました。先生のおたくは、石だたみの壁をくぐった土間のなもとがした。

「お願ひ、急ぎききよってかけこんで来たナディヤのたたくことではないよすに、おどろいたタチユカ先生は、顔もそこまこ大急ぎで、お願ひを聞きしめ、助けていたお母さんに急を告げると重をとびだし、ふとつたからたをふうふういわせながら奥道をのぼっていききました。

母さんは、父さんのひき手にだかれたまま、青い顔をして苦しんでいます。

「マリヤ、タチユカ先生がきてくたまった、もうだいいじょうよだよ、しっかりするんだ。」

母さんは、かすかにほほえむと、うめくようにいいました。

「とつせん、おなかに痛みが……。」

タチユカの先生は、きつそくかばんをあけると、鍼灸師をとりだして母さんをおみしました。

むすかしい顔をしています。

「よりあます、痛みをやわらけるよしよす。ナディヤ、お話をわかしておくれ。」

先生は、かばんから注射器をとりだし、痛み止めの注射器を打ちました。

ナディヤは、台所に行く、母さんがお菓子をおいていたキッチンストーブの残り火にまきをおき、火を入れたケルンをかきました。向こうの胡同では、父さんがタチユカ先生と話している声が聞こえてきます。

お母さんがいて、胡同に響んだときには、母さんのようには少し痛もつたようでした。

「痛み止めがきいてきたようだね、おじょうちゃん、お願ひとタオルを用意しておくれ。」

ナディヤが、お願ひとタオルを用意すると、タチユカ先生は洗面所にお母さんを入れてタオルをひたし、しほりて母さんのひたいをふきながらいいました。

「とまどまタオルをあたためてあげてくたさい、痛み止めがきいたら、落ちつくでしょう。しかし、ここはいちかたを、わたしにできることは一時しのぎにすぎない。をまてく早めに、大きな病院に入院するお願ひがありますね、マリヤスバの国立病院が最良なところのつて

